

---

# BLACK OUT

Noah

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLACK OUT

### 【コード】

N2927L

### 【作者名】

Noah

### 【あらすじ】

これは、単なる序章にすぎない…。

序章・引金（前書き）

目線：一ノ瀬俊次

## 序章・引金

薄暗い路地裏に、大きな銃声が響き渡った。その音を聴いて、奴は更に醜い悲鳴を上げる。

「や…やめろ、俊次！俺が何したってんだよ…！」

血まみれのおぼつかない足取りで走りながら、目の前の男が振り返って言った。

「ふざけるな。お前らのせいで美雪は死んだんだ」

俺は握った拳銃のセーフティを外し、その銃口を奴の顔に向ける。同時に男は壁際に追い込まれ、逃げられない、といったように腰を地面につけた。

「やめろ…やめてくれ…」

「黙れ、お前と話すことは何もない」

涙で滲んだ男の目を睨み、俺は引き金に指をあてる。そしてゆっ

くり、魂をこめるように、その指先に力を入れた。

「美雪の元彼、緒方清則」

俺は男の名前を呼び、狙いを奴の頭に定めて言った。

「お前の悪を、悔いる」

**第一章・邂逅（前書き）**

目線：高嶺康介

## 第一章・邂逅

薄汚い深夜の部室棟を、僕は訪れていた。廊下に足音を響かせながら、所属しているサークルの部室を目指す。ある人物に呼び出されていたからだ。

「明日、俺たちの部室に来てくれ」

同じサークルの同級生、一ノ瀬俊次から連絡があつたのは、昨日の夜のことだ。バイトから上がると、留守電にそう残されていた。本来なら今日もバイトなのだが、休みをもらってここに来た。というのも、ここ最近、俊次の行方が掴めなかつたからだ。声を聞いたのすら、五ヶ月ぶりだった。

「重要な話がある」留守電はそう続いていた。「あの事件のことだ」と。あの事件とは、五ヶ月前、ある一人の女子大生が遺体として発見された事件のことである。

そしてもうひとつ。信じられないようなことも彼は残していた。その真偽を確かめるために、今日ここにいます。

階段を上つてすぐ手前にあるドアの前で、僕は足を止めた。ドアノブのそばに、汚い字で『映画研究会』と書いてある。僕たちの部屋だ。僕はノブに手をかけて、鈍い音を立てながらゆっくりドアを開けた。奥に置いてあるベンチに、ひとりの男が座っている。一ノ瀬俊次だった。

「…来たか」僕を見て、呟くように彼はそう言った。

「悪いな、急にこんなところに呼び出して」

「いいよ。俺たちの部屋だろ」

五ヶ月ぶりに言葉を交わす。彼の顔は少しやつれ、いささか瞳が曇って見える。声にも生気がこもっていないようだった。僕は靴を脱いで部屋を歩き、俊次から見て右斜め横にあるベンチに腰をかけた。

「…久しぶりだな、康介」彼が僕の名前を呼ぶ。

「ああ。…今までどこ行ってたんだよ…?」

「…留守電の内容、聞いたか？」俊次は僕の言葉を無視して続けた。

「…聞いたよ。本当なのか？俊次」

僕は昨日の留守電を頭の中で反芻させながら問いかける。「本当だ」と俊次が答えた。彼は上半身を前のめりに倒し、視線を地面に向けて言う。昨日、留守電で言っていたことと同じ言葉を。

「人を殺した」

重く落ち着いた声で、俊次は確かにそう言った。僕は目を閉じて、少しの間思考を停止させる。信じたくなかった。しかし、彼の表情は嘘を言っている様子じゃなかった。僕は目を薄く開いて、彼をじっと見た。

「…どういうことだよ、人を殺した、って…」

「…言葉のとおりだよ」

俊次の姿勢は変わらない。まるで当然のことであるかのように、現実離れたことを話し始めた。

「最近この近辺で起きてる連続殺人事件…その犯人が俺だ」

二週間前から、連続殺人事件が起きていた。被害者は五人に及ぶ。そのどれもが同一犯とは確認されていないが、すべての被害者に同じ拳銃の銃痕があったらしい。その犯人が自分だ、と俊次は言った。

「なんで…そんなことを…？」

信じられないながらも、僕は彼にそう訊いた。彼は僕のほうを見て、まるで僕がその答えを知っているかのような口ぶりで答えた。

「お前も気づいてんだろ？被害者が全員、美雪の関係者だ、ってこと」

場が凍りついた。美雪…その女性の名前は、僕にとってのトラウマで、今まで口に出すことも、思い出すことすら拒み続けていた名前だった。

松本美雪が自殺したのは、五ヶ月前の彼女の誕生日のことだった。

俊次の恋人であり、僕の親友でもあった美雪が、彼女の家の風呂場で遺体として見つかった。手首を切って浴槽に浸け、失血死だった。警察はこれを自殺とし、事件は終了した。

しかし、僕らの間で事件は終わっていない。大切な人を突然失ったという現実は、一生消えることがないだろう。

そういうこともあって、俊次は行方不明になっていた。

「…美雪が自殺して、五ヶ月が経った。なのに遺書は見つからないし、理由もわからないままだ」と俊次。

僕は俯き、彼女の死を再確認する。俊次が続ける。

「俺は美雪の自殺の原因になりそうな人間を探して、片っ端から殺した……復讐のために」

復讐、という言葉が、僕の耳に突き刺さる。俊次はそのために行方をくらました。そして美雪のために、人を殺した。

「それで、何人もの命を奪ったのか」

「ああ」

「…その相手がたとえ、お前の友達だったとしても…？」

「関係ない」俊次の言葉に重みがかかる。「美雪を殺した人間は、誰であるかと復讐する」覚悟が伝わってくるようだった。

「…でも、あれからもう半年も経つんだぞ？自分の手を汚すくらいなら、関わらない方が…」

「じゃあお前は忘れられるのか？五ヶ月前のあの日、美雪の誕生日に起きたことを…」

俊次はそう言って目を閉じ、静かに吐息をついた。彼女の自殺を、第一発見者として思い出しているようだった。

## 第二章・過去（前書き）

目線：一ノ瀬俊次（五ヶ月前）

## 第二章・過去

「ほんとによかったの？誕生日当日にプレゼントなんか買いに行  
って」

携帯越しに女が言った。先ほどまで会っていた女だ。立花亜紀と  
いう。

「大丈夫、大丈夫。用意してないと思わせて、サプライズだって」

俺は揚々とした声で答える。これから美雪の誕生日プレゼントを  
渡すのだ。亜紀にはそのプレゼント選びに協力してもらった。

「別にいいけど、ちゃんと大切にしたりなよ」と亜紀。

「あいよ。じゃ、またね」

「バイバイ」

お互いに挨拶して、電話を切る。俺は足を止め、目の前の建物を

見た。美雪の部屋があるマンションだ。

2時ごろまでは、ここで美雪と一緒に今日で二十歳になる彼女の誕生日を祝っていた。ちょうどクラッカーを鳴らし、盛り上がりすぎてきたくらいに亜紀から電話がかかり、部屋を抜けてきた。

ずっと前から計画していたことで、誕生日プレゼントは当時買いに行き、いきなり渡してびっくりさせる予定だったのだ。そのため今日は手ぶらで彼女の家を訪れた。きっと喜んでくれる。俺は彼女の笑顔を想像して気分を躍らせながら、マンションの正門のロックナンバーを入力した。

全体的に黒色でコーティングされたこの真新しいマンションは、結婚したての夫婦が新居用に購入することが多く、学生が一人暮らしをするには少し不自然だった。14階建てで、各階に6部屋ほどある。美雪の家は804号室。大学進学と同時に一人暮らしを始め、本人曰く、「親がその辺には躊躇しない」だそうだ。俺が親なら、まず娘の一人暮らしに反対するだろうが。しかしそのおかげで、こうして遠慮なく彼女の部屋を訪れることができる。週に一回は泊まっているし、バイトがない日は極力訪れるようにしている。

マンションに入って突き当りの左手にエレベータがふたつある。玄関から見て手前のエレベータは使用中で、位置表示は“4”とあった。次に“3”に切り替わったから、誰かが降りてきているのだろう。奥のエレベータは“1”で止まっていた。俺は上のボタンを押し、奥にあるエレベータに乗った。“8”のボタンを押すと、扉

が閉まり、小さな箱は美雪の部屋がある8階に向かって上がりだす。俺は小さく吐息をつき、エレベータの壁に寄りかかった。

位置表示が“2”、“3”へと変わる。その表示が“4”になったとき、エレベータが停止した。扉が開き、ひとりの青年と目が合った。

「よう」とその青年。

「よう」と俺も同じように挨拶を交わす。福田祐樹という、同じ映画研究会の同級生だった。

「これから美雪ん家？」

「ああ。誕生日プレゼント買ってきた」

プレゼントを入れた袋を上着の右ポケットからチラッと見せると、祐樹はにやり笑った。人の恋愛をからかうのが彼の趣味だった。

「うらやましいねえ、ラブラブでさ」

「まあね」俺もにやり笑いながら答える。「お前は何してんの？」

「屋上でたそがれに行こうと思ってさ。次の映画のネタが浮かばなくて」

「大変だな、脚本兼監督は」

「大変だよ。ま、その分楽しんでるけどさ」

祐樹が笑顔で言う。彼は、映画研究会の若手エースと呼ばれる存在だった。年に4回ほどある自主制作映画の上映会で、彼は2年生にして脚本と監督の両方を兼任している。毎回文句なしの映画を作る男だ。俺も彼の映画が好きだし、たまに出演もする。

そうこうしている間に、エレベータは目的の8階に到着した。扉が開く。

「じゃ、またな」

「おう」

エレベータを出ると、後ろの方で扉が閉まる音がする。彼には映画作りを頑張っしてほしいものだ。そう思いながら、俺は美雪の部屋

を指して足を進める。

楽しみで震える指を上げて、チャイムを押す。

しかししばらくしても、反応がない。出てくる気配もない。

「…美雪？」

俺は玄関越しに彼女の名前を呼んでみた。やはり応答なし。ドアノブに手をかけると、それは軽くひねるだけで大きく回った。

「…なんだ、鍵開いてんじゃない」

ガチャリ、と鈍い音を立てて扉を開ける。

「ただいま」と声をかけたが、それでも返答はない。不在か？しかしその疑問は、耳にかすかに入ってくる音で解消された。ジャ、というシャワーの音。どうやら入浴中らしい。

「なんだよ、こんな時間にシャワーなんて」と、小さく胸を高鳴らせながら、俺はシャワールームへと足を進める。

「美雪、帰ったけど、部屋で待ってるから」

「……………」

応答なし。鳴り止まないシャワーの音

「……………美雪…？」

胸の奥のほうで、高鳴りとは違う、何か重苦しい不安のようなものが蠢きだした。なんだろう、この感覚…。

「……入るよ？」

俺は無意識のうちにシャワールームに入ろうとしていた。押しドア式のしきりを開けて、足を踏み入れる。ふと横に目をやる。

そこに広がっていた景色は、俺の視界を一瞬にして真っ暗に奪うには十分な光景だった。

降りしきるシャワー。排水溝に流れる赤い液体。浴槽に体を前のめりに倒している美雪。そのそばに落ちている真っ赤なカミソリ。

浴槽に浸かった美雪の手首。血に染まった湯船。

死んでいる美雪。

### 第三章・目的（前書き）

目線：一ノ瀬俊次

### 第三章・目的

「俺が駆けつけたときにはもう、美雪は死んでいた」

部室に重い空気がのしかかる。俺は俯いたまま、静かに呼吸を整えた。康介も黙って俯いている。美雪のことを思い出しているような、しかし思い出したくないというような、複雑な顔をしていた。

「……以来、俺は危険を侵して銃を手に入れ、美雪の元彼、美雪の友達、美雪の血縁者：多くの人の中から、美雪の自殺に関係ありそうな奴をこの手で殺した」

「……それが、復讐か」

康介が口を開く。哀しそうで、怯えているような声だった。

俺はその声を聞き、本題に入ることにした。

「……………そう。でも、あいつらは全員、ただの前座だよ。本当の復讐のためのな」

「…本当の、復讐…？」

康介の声に疑問がこもった。眉を吊り上げ、こちらを見ている。

「…ああ。美雪は自殺した。そう俺たちは知らされた。でも違う。美雪は、本当は…」

俺は一呼吸を置いてこう続けた。

「殺されたんだよ」

康介が目を見開く。拳に力がこもり、信じられない、といったよ  
うな表情を浮かべた。

「…殺された…？」

「ああ」俺ははっきりとそう答えた。

「…他殺と推測した根拠は…？」康介が問いかける。

「あいつが俺に何も言わずに自殺するわけがない。それに、他殺は推測じゃない。確信だよ」

康介の瞳が曇り始めた。何かを怖れているような目で、彼は空を見つめる。俺はたたみかけるように続けた。

「俺はその犯人に復讐するために、今まで何人もの人間を手にかけてきた。真犯人に、“いつか自分も殺されるかもしれない”という恐怖を味合わせた上で…殺すために」

「…それでお前が、人の命を奪う苦しみを背負うことになってもか」

「俺が、美雪の仇を討つために殺人を犯すことを、苦しいと思ったことはないよ」

声を落ち着かせて、俺はそう答える。康介は切なそうに俯いた。そしてこう言った。

「…お前が復讐のために殺人を犯すことを、美雪が望むと思うか？」

俺はそれを聞いた瞬間に何かがこみ上げ、怒りに任せて叫んでい

た。

「美雪の望みは関係ない！」

康介が驚いて俺を見る。俺の呼吸は自然と荒くなっていた。

そうだ。今まで殺してきた誰もが俺にそう言った。「美雪がお前にそんなことを望まない」、「復讐なんかやめろ」。

何も知らないくせに。美雪のことも、俺のことも。恋人を失った気持ちだが…大切な人を突然奪われた言い表しようのない感情が、他の人間に解るはずもないのに。

俺はため込んできた思いを吐き出すように言った。

「これは、殺された美雪の復讐じゃない。美雪を殺された、俺の復讐なんだよ…！」

拳に力が入る。俺の目は、康介を睨みつけていた。康介が黙ったまま立ち上がる。その姿をじっと見て、俺は続けた。

「…誰がなんと言おうと、俺は最後の復讐をする。止める気はな

い。美雪を殺した犯人を、この手で殺す。たとえそいつが、俺のよく知る人間だとしてもな」

「……………そうか」

康介は小さく答えて、背を向けるようにして俺の正面に立っている。俺はその姿が憎くてたまらなかった。いつもそうだ。俺たちに内緒で、何かを秘めているような、そんな風貌をしている。影、という表現が正しいのだから。そういうものを背負った男なんだ。そして、今回も…この事件でも。

康介は肩を揺らして、胸の内ポケットに手を入れる。

そして少し間をおいて、一瞬にしてこちらを向いた。

その右手には、漆黒の拳銃が握られている。

康介はその銃口をまっすぐ俺に向けて、驚いたように瞳孔を開いていた。

俺の銃口も、まっすぐ康介を捉えていた。

第四章・銃口（前書き）

目線：高嶺康介

## 第四章・銃口

俊次は、「復讐を止めない」と言った。「美雪の望みは関係ない」と。

僕が俊次を止めなくちゃいけない。彼の親友として。そして、美雪の代理として。

僕は胸の内ポケットに手をいれ、準備してきたそれに触る。昨日彼から電話があつて以来、必死で手に入れた拳銃だ。確かにここにある。グリップを握り、ゆっくり持ち上げる。初めて手にしたときにも感じたが、思ったよりそれは大きく、そして重い。

僕は一気に振り返り、拳銃を構えた。まっすぐに俊次の姿を捉える。彼の復讐を終らせる。たとえ僕が傷つくことになっても。できることなら説得で、不可能ならこの銃弾で。

僕の行動は、きっと彼を怖がらせる。いきなり拳銃を向けられるのだから。それでも構わないと思った。命を奪われそうになる恐怖を、彼にも味わってもらったほうがいい。そのほうがもしかしたら、この拳銃を使うことなく、彼が他人を傷つけ続けることを止められるかもしれない。

はずだった。

しかし、恐怖したのは僕のほうだった。俊次はいつの間にかベンチから腰を上げ、まっすぐ立って拳銃を構えていた。その銃口は、僕を向いている。

「……なんのつもりだ、俊次……」

「お前こそ何のつもりだ、康介」俊次が落ち着き払った声で返す。

「俺は……これ以上、お前に罪を重ねさせないために……」僕の声が焦っている。自分でもそう感じていた。俊次は間髪入れずに僕に言う。

「口封じのために、だろ？」

拳銃を握る僕の手には、嫌な汗がこみ上げる。僕は両手で拳銃をしつかり支えて、彼の言葉を理解しようとした。しかし空を突いたその言葉の意味が解らずに、僕は再び問う。

「……なに言ってるんだ？俊次……」

俊次が目を閉じた。ゆつくりと、僕にも聞こえるような大ききさでため息をつく。

「……祐樹を覚えてるだろ？」

祐樹は、福田祐樹という名前の同級生だった。同じサークルに所属していて、美雪と同じマンションに住んでいる。

「……祐樹が、どうかしたのか……？」

「……あの日……美雪が死んだ日、俺が美雪の部屋に向かう途中、あいつとエレベーターで一緒になったんだ。屋上へたそがれに行くんだ、って」

俊次の声に哀しみがこもりだした。真実を掴んでいる、そんな口ぶりだった。

「……それが……？」

「……事件から数日経って、俺は自分なりに美雪が死んだ理由を探して回ったんだよ。そして、祐樹に話を聞いた。あの日、何か変わったことはなかったか、って。大した証言は期待してなかった。でもあいつは、ある重大な事実を知ってたんだ。警察も、そして俺も

お前も知らなかった事実をな」

俊次は目を開いて僕を見る。そしてこう続けた。

「…あの日、俺以外に美雪の部屋を訪れた人間がいるんだ。康介、お前だよ」

## 第五章・証言（前書き）

目線：一ノ瀬俊次（五ヶ月前）

## 第五章・証言

信じられなかった。美雪が自殺するなんて。俺の思い込みかもしれない。でも、あの美雪が…あんなに一緒にいた美雪が、俺に黙って自分で死ぬわけがない。誰かに殺されたんだ。自殺に見せかけて、美雪を殺した奴がいる。探すんだ、そいつを。俺の手で必ず。

美雪が死んで一週間が経つ。聞き込んで回った人間はすでに五十人を越えていた。今日は彼女のマンションを訪れている。これで三度目だ。俺はセキュリティの暗証番号を入力し、正門を開ける。こうしていると、普通に美雪の家に遊びに来た感覚に陥り、気分が沈む。

彼女はもういないんだ。

そう言い聞かせて、あの日のことを思い出しながら足を進めた。上着の右ポケットに入ったままのプレゼント…渡せなかったな。

エレベータが1階で止まる。それに乗り、俺は美雪の部屋を目指した。位置表示が“4”になったとき、エレベータが止まった。入ってきたのは、あの日と同じ祐樹だった。胸に靄のようなものがかかる。それを察したのか、祐樹は一言「…ごめん」と言った。俺は何も言わず、ただ俯いた。

「……………」

小さな空間に静けさがこだまする。何か言わなくちゃいけない。先に口を開いたのは俺だった。

「…これからまた屋上か？」重苦しい空気が少しだけ軽くなる。

「…ああ。今日はたそがれに行くわけじゃなくて、美雪のことを考えに…」言いかけて、祐樹が口を噤む。しまった、というような表情だった。「…ごめん」彼は再び謝って、視線を下に落とした。

「…気にしなくていいさ。お前が気に病むことじゃない」

「…ごめん…」

「…屋上か。美雪とよく行ったな」

俺は上に視線をやり、彼女が死ぬ前のことを思い出していた。この屋上はちよつとした庭園のようになっていて、色とりどりの花が植えてある。住人やその関係者しか入れないため、デートするとかきや、物思いに耽りたいときには最適の場所だった。俺と美雪も、

屋上でよく一緒に語り合ったものだ。

小さく機械音が鳴り、扉が開く。位置表示は“8”を示していた。美雪の部屋がある階だ。しかし俺は“閉”のボタンを押し、その階をやり過ごすことにした。エレベータは、屋上に向かってゆっくりと上り始める。

「…降りなくてよかったのか？」と祐樹。

「…屋上行くんだろ？俺も一緒に行くよ。ちょっと語りたんだ」

エレベータの扉がまた開く。その瞬間に、少し冷たい風が流れてきた。俺と祐樹はエレベータから一歩踏み出して、屋上のコンクリートを踏む。少し風が強い。春になると花を咲かせる植木は、茶色の枝を裸で剥き出していた。季節は秋だ。

「…思い出すよ、美雪と一緒にここに来たときのこと」

胸のあたりまである屋上の柵に腕を乗せ、俺は独り言のように言

った。祐樹も同じように上半身の体重を柵にかける。

「…そっか」祐樹が言った。俺は視線を植木の方に移し、ある一本の小さな木を見つめた。思い出の木だ。

「あそこに一本だけ、他とは形の違う木があるだろ？」

「…たしかに。なんか面白い枝の伸び方だな」

「…あれ、春になると白い花が咲くんだけ。たまたまだろうけど、枝の形があんなんだから、花びらがきれいに横向きに咲いて、上から見ると雪の結晶みたいになるんだよ」

美雪が教えてくれた。無邪気な顔で笑いながら、俺が言ったことと同じことを言った。

「すっごくきれいなんだよ！春になったら一緒に見ようね！」その木を覗きながら、美雪が言う。

「ふうん…雪の結晶みたいな花なんて、あんまきれいじゃないと思うけど」なんだか照れくさくて、俺はあしらうようにそう返した。

「なんで？いいじゃん、雪。あたしの名前も“美雪”だよ？だから勝手に、あの木に名前つけたの。“美雪の木”って」

「ださ、なにそれ」俺はからかうように笑う。

「ちょっと、笑わないでよ…っ」美雪は照れた顔で拗ねて言った。しばらくして、自分でもおかしくなったのか、いきなり笑い始めた。俺もつられて笑う。

そうやって、ふたりで笑い合ってたんだ。もう叶わない。一緒に見れなかった、思い出の花の木。

「……春になったら、見に来いよ。美雪も、天国から見てると思う」

空を見上げて祐樹が言った。彼なりに気を遣ってくれたらしいのだが、ロマンティックすぎて思わず笑ってしまった。

「…わかった、そうするよ」

俺は吐息をついて、表情を変えた。あの日の話を聞こう。事件の情報を得るために。美雪の死の真相を暴いて、春になってあの花が咲いたとき、少しでも晴れた心で見えるために。

「…覚えてないか？なんでもいいんだ。事件があった日、もしくはその前からでも、美雪の周りに何か変化があったりとか、マンションに怪しい人間がいなかったかとか」

「…ごめん、刑事やってる俺の姉ちゃんにも同じこと訊かれたけど、特に何も無いんだ…」

「……そうか」

俺は視線をマンションの下に向けた。屋上から見ると、地面がかなり低いところに見える。ここから落ちたら死ぬだろう。このまま死んでも構わない…不思議とそう思えるような高さだった。

「…むしろお前のほうこそ、何か変なことはなかったのか？あの

日は美雪の誕生日で、昼過ぎまであの部屋にいたんだろ？たとえば、プレゼントを買いに行くときに誰かとすれ違わなかったか、とかさ」祐樹が言った。

「すれ違ったら覚えてるよ」

「…だよな…まあそうだとしたら、康介のほづが詳しいだろうし」祐樹がふいに“康介”という名前を出した。俺は何か引っかけか、祐樹のほうに視線をやった。

「康介…？なんで康介が出てくるんだ…？」

「なんで？って、あの日お前と美雪と康介の三人で祝ってたんだろ？」

何を言ってるんだ？祐樹は。三人で祝ってなんかない。あの日は俺と美雪のふたりだけだった。それどころか、康介の姿すら見ていない。

「…え？違うのか？いや、だとしたらなんで…？どついうことだ…？」祐樹は何かを考えるようにそう続けた。

「それはこっちが訊きたいよ。お前さっきから何言ってるんだ？あの日は俺としか会わなかっただろ…？」

祐樹が不思議そうな顔をする。曇ったような表情だ。祐樹が言おうとしていることがわからない。

そうだ。あの日は確かに、俺と美雪しかいなかった。ふたりでケーキを用意して、部屋を暗くして、ろうそくを消し、同時にクラッカーを鳴らした。ちょうどそのときに亜紀から電話がかかってきて、部屋を抜けて誕生日プレゼントを買いに出かけた。康介なんかいなかったはずだ。

しかし、次に祐樹の口から発せられたのは、信じられないような言葉だった。

「…いや、あの日エレベータでお前と一緒にあっただろ？その前にもうひとつのエレベータを待ってたら、俺がいた4階を通り過ぎて下に行ったんだ。そのエレベータに乗ってたんだよ、康介が」

第六章・追込（前書き）

目線：一ノ瀬俊次

## 第六章・追込

「……………！」

康介が驚きの表情を浮かべる。それはそうだろう。この五ヶ月間、誰からもその事実を咎められなかったのだから。逃げられると思っ  
なよ。

俺は銃口を康介に向けたまま、諭すように口を開いた。

「…お前が殺したんだろ？康介」ずっと訊きたかった。この男に俺や美雪の親友に。「…なんでだよ？俺たち三人、あんなに仲良かったのに…なんで美雪を殺したんだよ…？」

俺の声は、無意識に昂ぶっていた。感情的になっっているのが自分でも解る。当然だ。この五ヶ月…その答えだけを求めていた。そのために何人も人間を殺し、康介を精神的に追い込んだ。

あの日、いるはずのなかった康介が、何故美雪のマンションを訪れていたのか。

なんでそのことを話さなかったのか。

どうして美雪を殺したのか。

康介は黙っていた。苦悩に歪んだ表情で、頭を抱えている。その様子がやけにイラついて、俺は声を荒げて彼を追い詰めた。

「…答えるよ！」

康介が大きく目を見開く。

「…う…うわあああああっ！」

彼は突然膝をがくつ、と折り曲げ、地面に身体を落として叫びだした。

隠していた記憶の断片を、強制的にこじ開けられたような叫び声だった。

**第七章・恋心（前書き）**

目線：高嶺康介（五ヶ月前）

## 第七章・恋心

美雪の部屋に、三人の笑い声が響き渡る。俊次と美雪のノロケ話を初めて聞いているときのことだった。

「……いや、でもまさか、ふたりが付き合つことになるなんて思わなかったよ」

僕が笑顔で言う。この日初めて、俊次と美雪が付き合い始めたことを聞いた。一週間前のことらしい。僕たちはきつと、ずっと友達以上恋人未満の関係なんだと勝手に思っていた。いや、正しくは、そう思い込ませることで自分の感情を抑えていた。

「大丈夫、康介にもすぐ彼女できるって」

俊次が笑みを浮かべながら言う。嫌味なのか応援なのかわからないが、きつと僕の本心は知らない。僕と俊次に挟まれて、美雪も笑みを浮かべる。その笑顔がたまらなく愛おしくて、そして憎かった。

「……いやいや、俺なんか全然だよ」と、強がってそう答えてみせる。俊次は、興味ない、といったように目の前のマンガを手に取って読み始めた。

「…好きな人いないの？今」

美雪が僕に問いかける。そうだ。彼女もきつと、僕の想いには気づいていない。彼女はまっすぐ僕を見ている。その何気ない質問や仕草が、僕の心を深く傷つけているとも知らないで。

「…ん〜、特にいないかな。何が“好き”っていう感情なのかも、まだ解ってないし」

僕は苦笑を浮かべてそう答えた。頬がぎこちなく引きつっているのを感じる。「ふ〜ん…」と美雪が、納得したような、しかし疑問を覚えているような声でそう言った。哲学なんて興味ないだろう？僕は視線を俊次に向けた。彼はまだマンガを読んでいる。

「…ねえ、俊次にとって“好きな人”ってなに？」

からかうつもりだった。恋人である美雪が目の前にいる。答えられるはずはない。僕にだって、ちよっとふたりを困らせるくらいの権利はあるはずだ。

「…う〜ん、そうだなあ……」俊次が言う。

「ちょっと、やめてよ恥ずかしいっ！」

美雪が慌てだす。その様子が、素直に可愛いと思った。横目でそれを見ながら、俺は俊次をじっと見ている。彼はマンガを机に置き、少し悩んだあとにこう言った。

「大切な人……かな」

僕はその言葉に、思わず心打たれていた。普段冷静な俊次から、そんな言葉が出てくるとは思わなかったからだ。そうか、これが恋愛というものなんだ。浮かれているとか、そういうものじゃない。ただ純粹に、想っている感情を素直に伝えたいくなる。俊次もそうなんだ。本当に美雪のことを大切に想ってるんだ。

「答えなくていいよ、もう……っ」と、美雪が膝に顔を埋めてつぶやく。彼女もきつと、俊次のことをそう想っている。大切な人なんだ、と。

僕は少しふたりのことが微笑ましく思えて、からかい笑いではなく、自然と無垢な笑みを浮かべていた。

「大切な人、か……」

僕は隣で照れている美雪を見た。結ばれることが叶わなかった、想い人を。いつか三人がばらばらになってしまふことが、いつかお互いを深く傷つけ合ってしまうことが怖くて想いを伝えられなかった、大切な人を。

僕はふたりを祝福した。これからの未来に、幸せがありますように、と。

でもやっぱり、純粹にそう思うことができなかった。きっと僕の目は、嫉妬で曇っている。美雪を見つめるその視線には、喜びと同時に憎しみがこもっている。

なんでだよ。なんでそうやって照れさせてあげれるのが、僕じゃないんだよ。

そう思ったとき、ほんの一瞬だけだったが、彼女のことを急に抱きしめたくなった。たまらなく愛おしい。壊してしまいたいくらいに。殺してしまいたいくらいに。

第八章・対峙（前書き）

目線：一ノ瀬俊次

## 第八章・対峙

叫び声がおさまると、康介は再び黙り込んだ。

「…殺した理由も忘れたか。…わかったよ…」

俺は諦めたように、小さくため息をついた。これ以上言っても時間の無駄だ。右手で握った銃を下ろし、左手でセーフティを外す。カチャリ、という音が、静まり返った部屋にこだました。

「…何も喋らなくていい。俺が美雪のもとへ送ってやる。そこで、灰になるまであいつに謝ってこい」

俺はゆっくり銃口を康介に向けなおし、狙いを彼の頭に定めた。

「…美雪の、そして俺の親友、高嶺康介」

彼の名前を呼ぶ。指を引き金にかけ、俺は続けた。

「お前の悪を、悔いる」

そのとき、康介がふいに口を開いた。

「……そうだ……」

「……………」

俺は撃つのを止め、康介の言葉に耳を傾けた。彼はうな垂れたまま、自分に言っているようにこう続けた。

「……俺が美雪を殺した……。俺が……俺が……………」

そして彼は、俺が驚くようなことを言った。

「俺が美雪を、見殺しにしたんだ……！」

「……………見殺し、だと……？」

「……助けることができなかった。あんなに近くにいたのに……」

康介は俯いたまま呟くように言っていた。

「…助ける…？どういうことだ…？」

意味が解らず俺が問う。見殺し？違う。こいつが殺したんだ。この男が、自殺に見せかけて美雪を殺した。

「…そうだ。助けることができなかつたんだよ。いや…助ける気がなかつたんだ。俺はなんてことを…」康介は下唇を噛みながら涙をこらえるようにして呟き続けている。

「…さっきから何を言ってるんだ…？お前が美雪を殺したんだろ…？お前があいつの手首を切って、浴槽に浸けて、自殺に見せかけて…」

「…違う…美雪は、本当に自殺したんだよ…！！」

康介がようやくやく言葉らしい言葉を発した。そして俺は、その言葉に耳を疑った。本当に自殺した、だと…？

「…ふざけんなよ、康介。俺は知ってるんだ…お前があの日、美雪の家を訪れてたこと…お前が美雪を殺したってこと…！！」

「違う！」

「じゃあなんであの日美雪の家にいたんだ！」

互いに張り上がった俺たちの声が、深夜の部室に響き渡る。それは一瞬だけふたりの間を包み、そして数秒の間、沈黙が訪れた。俺と康介の荒れた呼吸音だけが空間を支配した。康介は息を整え、覚悟を決めたように口を開いた。

「…俊次には黙っておくように言われたんだ、美雪に…でも、お前には知る義務がある。あいつが…美雪が抱えていた痛みを…」

「……痛み…？…なんだよ、それ…“俺に黙っておく”って、なんのことだよ…！」

思考が混乱する。頭が痛くなり、耳鳴りが始まった。俺は銃口を康介に突き出し、促すように問いかける。康介は生唾を飲み込み、静かに語り始めた。目には涙が浮かんでいた。

「……あの日……あの日俺は、美雪に呼び出されてたんだよ……“相談がある”って……」

「…相談…？」俺は無意識に、左手で頭を押さえていた。眉毛も吊り上がり、嫌な汗をかいている。何かが破裂しそうな感覚だった。…美雪がお前を呼び出したのか…？」

「…ああ、そうだ。俊次…お前の、暴力のことで…」

「……………！」

動悸が激しくなり、頭や胸の内側から硬いもので殴られている気がした。心臓が痛い。

俺の暴力で自殺…？

康介が小さく吐息を漏らす。目から地面に向かって涙が垂れている。彼は当時のことを思い出すようにこつ続けた。

「…美雪は、ずっと悩んでたんだ…何かあるたび自分に暴力を振るってくるお前のこと…それで、俺に相談を…」

不思議とそのときの光景が、俺にも流れ込んでくるようだった。

第九章・後悔（前書き）

目線：高嶺康介（五ヶ月前）

## 第九章・後悔

隣で美雪の泣き声がする。

僕はどうしていいのかわからず、ただ黙って彼女の肩を抱いていた。かすかに漏れる嗚咽が、僕の胸に直接伝わる。俊次に対する激しい怒りと、気が狂ってしまいそうなほどの切なさがこみ上げてきた。

「…ごめんね…泣くつもりなんか、なかったのに……」

消え入るような声で、美雪がそう言った。肩を抱く腕に力が入る。

「…大丈夫。我慢しなくても…大丈夫…」

僕は不器用にそう答えた。こういうとき、なんて言っているのか僕は知らない。女性の慰め方が解らず、無性に悔しくなった。彼女の痛みを癒してやりたい。でもその術を僕は持たない。

俊次からの暴力のことは、これまでに何度も彼女から聞いてきた。もともと気性の荒かった俊次は、普段こそ笑顔を振りまいているが、腹を立てると止められないほど暴れる癖があった。だから俊次と美雪が付き合い始めたとき、僕はそれを予期することができたはずなんだ。でもそのときは、ふたりが恋愛関係に発展してしまったショックで頭がいっぱいで、俊次の暴力を考えている余裕がなかった。何故あのか、俊次に釘をさせなかったのか。何故あのか、美雪に注意できなかったのか。

しかしそれを考えたところで、無意味であることはわかっていた。どれほど事前に注意しようと、後から悔やむことになるから“後悔”というんだ。

今とはとにかく美雪を慰めるべきだ。この日の彼女はいつもと違っていた。誕生日なのに俊次がいないうちに僕を呼び出し、そして初めて、僕の前で涙を流した。

何か言わなくちゃいけない。僕は頭に浮かんだことを口に出した。

「…全部俊次が悪いんだよ。美雪は悪くない…全部俊次が…」

言いかけて、僕は慌てて口を嚙む。自分の言葉が信じられなくて、思わずはっとする。

なんてことを言っているんだ、僕は。全部俊次が悪いだなんて…。そんなこと思ってるはずない。

…いや。思おうとしたりたくないだけなのかもしれない。理性で抑えているだけで、本当はそう考えている。

俊次さえいなければ。

美雪を笑顔にさせるのも、美雪を泣かせるのも、美雪を愛するの  
も、美雪が愛してくれるのも、全部俊次ではなく僕だったら。

そう思ったとき、自分の中の悪魔が出てくるような感覚に陥った。

僕はゆっくり立ち上がり、その場を去ることにした。このままここにいては、僕は美雪に何かしてしまいそうだ。

「…じゃ、俺は帰るね。今日はもう休みなよ。ひとりで考えることだって大切だよ。何かあったら、また呼んで」

そう言い残して、僕は彼女の部屋をあとにした。遠く後ろのほうで、彼女が静かに吐息を漏らして泣いているのを感じた。

外に出ると、灰色の雲が空の半分を覆っていた。太陽が翳り、寒気がする。ひと雨来そうだ。僕は羽織っていたコートのボタンを閉め、足を進めた。

しかし、これで本当にいいのだろうか。嫌な予感がする。このままでは、何か取り返しのつかないことが起こるような…。

自然と足が止まる。振り返ってマンションを見上げると、美雪の部屋がやけに高いところに見えた。

このままじゃいけない。僕は引き返し、走って彼女の部屋に戻ることにした。

正門で暗証番号を入力する。自動ドアが開き、先ほど降りてきたエレベータに乗りなおし、“8”のボタンを押して彼女の部屋を指した。そのスピードが異様に遅く感じて、苛立ちを覚える。どれほど長い間乗っていたのか、ふとエレベータが開く音ではっとする瞬間、僕は飛び出して彼女の部屋まで駆け足で歩いた。

チャイムを鳴らす。返事がない。本当に嫌な予感がする。胸に何かがのしかかるような、身体から全ての神経が消え失せるような。

焦ってドアノブを回すと、それは驚くほど簡単に回った。

僕は勢いよくドアを開け、玄関に入り込んだ。動悸がする。

「美雪！」

返事がない。耳に入ってくるのは、シャワーの音。

…シャワーの音…？



美雪が死んでいる…。

どうしよう…。

なんとかしなければ…なんとか…。

いや…まだ死んでないかもしれない…まだ、まだ何かできるかもしれない…。

動け…動け…。

必死で身体を動かそうとする。

必死で頭を働かせようとする。

そうだ…救急車…救急車を呼ばなくちゃ…。

ポケットを探る。携帯がない。こんなときに限って忘れてきていた。

自宅の電話からなら…。

シャワールームを出て、感覚がない足でリビングに向かう。

受話器を取ろうとすると、部屋の真ん中においてある小さなテーブルの上に手紙のようなものが置いてあるのが目に入った。「俊次へ」と書いてある。

それを目にした瞬間、僕の中で悪魔が囁いた。

「…自業自得だよ、全部…」

悪いのは僕じゃない。美雪を大切にしない俊次が悪いんだ。そして、それでも俊次を愛そうとする美雪が悪いんだ。

再び頭が前が真っ白になった。何も見えない。何も感じない。何も…何も。



ふと肌に冷たいものを感じて意識が戻る。次に僕の目に入った光景は、いつものように歩く人々の影と、涙を流すようにゆっくりと雨を降らし始めた灰色の曇り空だった。

第十章・真実（前書き）

目線：一ノ瀬俊次

## 第十章・真実

「…はは…俺が、美雪に暴力…？あれは、あいつのためを思つての教育で…それで…それで…」

無意識に笑つていた。何を言い出すんだよ、康介。そんなわけないじゃないか。たかが暴力で、美雪が死ぬなんて。

「…それで…あいつもそれが俺の愛情なんだって解つてて…」

「違う！」康介が声を張り上げた。「…お前にとってどうだろうと、美雪は本当に苦しんでんだ…！誰にも迷惑かけたくなくてなんでも自分ひとりで解決しようとするあの優しい美雪が、友達の俺に泣きつくほど苦しんでんだ…！」

「……うそだ……」

「…なのに俺は…何もできなかった…あいつがあんなに苦しんでるところを見たのに、ちよつと目を離した間に、あいつを自殺させた…」

康介が声を震わせて泣き出した。

嘘だ。そんなはずはないんだ。俺のせいで、美雪が自殺するわけがないんだ。

「嘘だ…嘘だ…」

俺は道化のように繰り返していた。頭に灰色の霞がかかる。康介も道化のように喋っていた。

「…それどころか…俺は現実から逃げたんだ…！お前に美雪をとられたことが悔しくて…俺よりもお前を愛した美雪が憎くて、何もしないで逃げ出したんだ…！死ぬんじゃないかって…それほど追い詰められてるんじゃないかって、心のどこかで思ってたはずなのに…！」

「…嘘だ…」

嘘だ、嘘だ。頭が重い。嘘だ。違う。そんなの違う。霞が一気に濃くなるのを感じた。

「嘘だ！」

「あいつの自殺の本当の原因は！」

俺が叫ぶのと同時に、康介も声を荒げた。そしてゆっくり顔を上げ、俺の目を睨みながらこう続けた。

「…美雪の自殺の本当の原因は………俊次、お前だよ………！」

視界が、真っ黒に染まった。

第十一章・自殺（前書き）

目線：松本美雪（五ヶ月前）

## 第十一章・自殺

俊次からの暴力が、もう二十回を越えた。衣服に隠れたアザを触る。肌に痛みを感じると同時に、心にそれよりも激しい痛みを感じた。

私は部屋のソファにうずくまり、先ほどの光景を思い返していた。まだ信じられない。でもそれが現実だと、受け入れるしかなかった。

私の誕生日会中、俊次の携帯に電話がかかってきた。かすかに聞こえる受話器越しの声は、女性のものだった。

「じゃ、俺ちょっと出てくるから」

電話を終えると、彼はそう言って部屋を出て行った。

恋人の誕生日なのに、他の女に会いに行くの…？

私は胸に重くのしかかるものを感じて、彼のあとをつけることにした。するとマンションの正門の先に、ひとりの女性が目に入った。黒髪で若い、私と同じ年齢くらいの女性だ。

「亜紀！」

俊次がそう呼ぶと、黒髪の女性が笑顔で片手を挙げた。俊次が彼女に向かって陽気な足取りで近づいていく。どうやら亜紀というのが彼女の名前らしい。

「待たせてごめんね。じゃ、行こうか」と俊次が言う。

ふたりは歩き出し、私の視界から消えた。

…そっか…私は俊次にとって、その程度だったんだね。

私がどんなに涙をこらえても、俊次に想いは届かなかったんだね。

ぐっと唇をかみ締める。悔しさと哀しみが同時にこみ上げて、何かわからない感情が芽生えた。もう、生きているのがつらいよ。

ごめんね、みんな。

ごめんね、康介。

ごめんね、俊次。

私はお風呂場を目指して足を進めた。浴槽に水がたまっている。しばらくその水を眺めた後、意を決して右手にカミソリを持った。鋭利なもので、今まで使おうとしながら使えなかったものだ。このときのために買った。

震える右手で左腕の脈辺りに刃先を突きつける。うっすらと濁った血が滲み出ると同時に、私は勢いよくカミソリを引いた。直線状に血が溢れ出す。痛い。けど不思議と、つらい気はしなかった。

「私はこれから、逃げるんだ。」

現実から。

人生から。

自分から。

浴槽に腕を浸ける。

傷口から血がじわり水に染み込んでいく。

意識が薄れていく。

目を閉じると、血の気がなくなるのが解る。

命が奪われていくのを感じる。

もつ目を開けることはないだろう。

さようなら、みんな。

さようなら、康介。

さようなら、俊次。

大好きだったよ。

第十二章・絶望（前書き）

目線：一ノ瀬俊次

## 第十二章・絶望

…嘘だ…嘘だ…。

「…俺が…美雪の自殺の、本当の原因…？…俺が、美雪を…美雪を殺した…？」

目の前が真っ暗で、何も見えない。何も感じない。何も…何も…。

身体中の感覚がなくなり、俺は膝を折って地面に足をついた。同時に、康介がよろけながら立ち上がる。

ふと、手のひらから何かが抜け落ちのを感じた。音を立てて拳銃が床に転がる。それを目にした瞬間、全身の血液が逆流し、何かに身体を引っ張られるような感覚に陥った。

気がついたとき、俺は拳銃を再び握って、その銃口を自分のこめかみに突きつけていた。

そつだ。このまま死んでも構わない。

いや……死ぬべきなんだ。

「やめろ！」

大きな叫び声が耳を貫いて、はっと我に返る。康介が真剣な顔で俺を睨みつけていた。

「……やめろ、俊次。これ以上罪を重ねる気が……！」

康介が続けた。

「……罪……？」

俺はただ、その罪を償おうとしただけだ。

俺は美雪を殺した。

美雪を自殺に追い込んで、その上で何人もの関係ない人たちを巻き込んできた。

これは罪滅ぼしなんだ。

「…罪じゃないよ、康介。贖罪だ。俺はこの命を以って、今まで傷つけた人に謝るんだ…」

「違う！自殺するのは、罪滅ぼしでもなんでもない。ただの逃避なんだよ…！美雪がそうであったように…現実と向き合おうとせずに、逃げてるだけなんだ…！」

わけが解らなくなって声がかすれる。俺の目には、いつの間にか涙が溢れていた。

「…じゃあ…じゃあどうしろってんだよ…？今までしてきたことが、全部俺の思い込みで…他人も…友達も…美雪まで殺したのに…その罪と、その苦しみを背負ったまま惨めに生きろってそう言うてんのかよ…！」

「そう言っただよー！」

康介が声を上げる。彼の目にも涙が溢れ、苦痛と悲愴に歪んだ顔をしていた。そして、震える声でこう言った。

「…俺は今日、お前を止めるためにここに来た。…でも、もしかしたら本当は、お前を殺しに来たのかもしれない。美雪を死に追いやった罪滅ぼしをさせるために。美雪を死に追いやられた復讐をするために。…でも間違ってた。人を傷つけておいて、勝手に死ぬのは贖罪じゃない」

罪だ、と康介は続けた。過ちを重ねるだけだ、と。

「…でも…俺は、どうしたらいいんだ…」

「…お前は生きる、俊次。お前が奪った命の分、生きて、できる限り償って…あの世で美雪に顔向けができるようになるまで…」

言いかけて康介が目を瞑る。そして何かを吐き出すような吐息をついたあと、俺の目をまっすぐ見つめて名前を呼んだ。

「一ノ瀬俊次。お前の悪を、悔いる」

「……………！」

内側から熱いものが込みあがってきた。俺はなんてことを考えてたんだ…。人の命を奪って、そのまま謝りもせず死のうとしていたただなんて…。美雪の自殺とはわけが違うんだ。これは罪滅ぼしじゃない、罪だ。

俺は拳銃をおろし、それを静かに地面に置いた。

康介がゆっくり近づいてくる。先ほどまで拳銃が入っていた胸の内ポケットを探っていた。そしてすぐ傍まで来たとき、ポケットから何かを取り出し、俺の目の前にそれを突きつけた。A4サイズの紙を四つ折りにした、手紙のようなものだった。

「…美雪からお前に、遺書代わりの手紙だ」

「……………」

俺は黙ってその紙を手に取り、そつと開いてみた。

そこにはいつ書かれていた。

第十三章・手紙（前書き）

目線：松本美雪（五ヶ月前）

### 第十三章・手紙

手さげ袋くらいの小さなカバンに入ったカミソリを手にしたとき、同時に私はその中から一枚の紙を取り出した。

これもまたカミソリと同様、このときのために用意したものだ。

遺書なんて書くのは初めてだった。こうして紙を目の前にすると、今まで考えてきたことが何も浮かんでこない。

ひとまず大切な人のことを考えてみた。家族、友達、親友、康介、そして俊次…。みんなの笑顔が頭に浮かぶ。もう会えなくなる人たちなんだ。

ごめんね、お父さん、お母さん。あんなに私のこと大事に育ててくれたのに…。

ごめんね、康介。あんなに私のこと想ってくれてたのに…。

ごめんね、俊次。あんなにふたりで笑いあっただのに…。

ふと死ぬのが怖くなって、自然と涙がこぼれてくる。

でも、やっぱりもう耐えられないんだ。

私は意を決して、黒いペンを手に取った。

そつだ。“遺書”だなんて考えなければいい。

私のあるがままの想いを書こう。

せめて最後くらいは、大好きな俊次に想いが届くように。

私は前かがみになり、涙を手でぬぐいながら筆を進めた。

俊次へ。

あなたに何も言わず勝手に死ぬこと。

あなたの愛情表現を、うまく捉えることができなかったこと。

そしてそれに耐え切れず、落ち込むような弱い彼女だったこと、許してください。

覚えてますか？昔言ってくれたこと。

俊次にとっての、“好きな人”。

それは“大切な人”だって言ってくれたよね。

私もそうだなんて、そのとき思った。

そしてそれからずっと、どんなに傷つけ合っても、どんなに会えない日が続いても、俊次のこと、大好きだった。

馬鹿だなんて思うかもしれない。

くだらないって、みんなから思われるかもしれない。

それでも、私にとって俊次は、世界にたった一人しかいない、“大切な人”だったよ。

なのに、こうしてひとりで命を落とすこと、本当にごめんなさい。

つらかったからじゃない。

これ以上、俊次に傷つけることの痛みを背負わせたくなかったから。<sup>ら。</sup>

だからもし、私が死ぬことで、誰かを傷つけることの罪を償うことができれば、それだけで、俊次にとって私は、“意味のある彼女”であったんじゃないかと思うことができます。

だからこれからは、誰も傷つけない人になってください。

少しでも多く自分を反省して、次はちゃんと大切にできる彼女を作ってください。

おやすみなさ。

ありがとう。

松本美雪

第十四章・希望（前書き）

目線：高嶺康介

## 第十四章・希望

手紙を読み終わると同時に、俊次は大量の涙をこぼしだした。

「…ごめん…美雪、ごめん…！」

彼の痛みが僕にも伝わってくるようで、胸が苦しくなる。

「…俊次、お前にとって美雪は、“ただの彼女”だったかもしれない。お前は多分、いつも自分主体だった。“美雪は俺の彼女で、これは俺の復讐で、俺のために、自分のために”。…でも美雪は、いつも他人主体だった。“自分は誰かの友達で、自分は俊次の恋人で、誰かのために、俊次のために”。…だからもしかしたら、お互いの想いが一步通行で、すれ違うことも、ぶつかるとも、一緒に通じ合うこともなく、美雪ひとりへのしかかったんだ…」

言いながら僕自身つらくなった。僕も彼女に何もしてやれなかった。どんなときでも、誰かのことを考えて、他人のために生きていた美雪に対して、僕たちは何もしなかったんだ。

それどころか、嫉妬や八つ当たりまでして、一方的に彼女を追い詰めた。美雪を殺したのは俊次だけじゃない。

僕たちは彼女を愛するあまり、彼女の愛に気づけなかったんだ。

俊次が嗚咽を漏らしながら、壊れたように彼女の名前を呟き続けている。今なら純粹にこう思える。

生きてくれ、俊次。お前のために、俺のために、美雪のために。

僕は俊次の肩を静かに叩いて、何も言わず彼に背を向けた。僕たちの間に、もう言葉は必要ないと思った。

「……………美雪……………」

遠く後ろのほうで、美雪を呼ぶ声がする。俊次の声だったかもしれない。あるいは、僕の口から無意識に出た声だったかもしれない。

しかしそれはどうでもよかった。

いまはただ、彼女の名前がたまらなく愛おしく感じた。

彼女はもうこの世にはいない。もう僕たちの想いを伝えることは

できないし、彼女の想いを聞くこともできない。

僕は部室の扉を開き、一度も振り返らずに部屋をあとにした。

外に出ると、ずいぶん長い間あの空間にいたような感じがした。もう朝が近づいている。春の夜明けの少し冷たい風が吹き、空は遠くゆらめく太陽の光で、薄い灰色に染まっていた。

最終章・選択（前書き）

目線・一ノ瀬俊次

## 最終章・選択

生暖かい春の風を肌を感じる。

遠く下のほうでは車や人がせわしなく歩き回り、空は美しい水色に染まっていた。

美雪のマンションの屋上に立ち、俺はフェンスの前で景色を眺めていた。こうしていると後ろから美雪が声をかけてくるような気がして、ふと振り返ってみる。きれいに植えられた苗木が、色とりどり満開の花を咲かせていた。

上着の右ポケットに手を入れる。そこにある小さな袋を取り出すと、中に入っている雪の結晶の形をした髪飾りがきらりと輝いて見えた。

自然と笑顔がこぼれる。この誕生日プレゼントを渡せていたら、どれほど幸せなときを彼女と一緒に過ごせただろう。

俺はそれを再びポケットに入れ、同時に拳銃を取り出した。

美雪。

俺はお前に一度も謝らなかつた。

感謝もしなかつたし、一度だって尽くしたことはなかつた。

でも最後に言わせてくれ。

ごめん。

そして、ありがとう。

わかつてる。

死ぬことは罪滅ぼしじゃないって。

でも、もう俺は償いきれないほどの罪を犯した。

他人に対しても…美雪、お前に対しても。

だからこれは、償いでも、戒めでもない。

俺が貫く最後の復讐で…俺の、最後の罪だ。

拳銃をこめかみに当てる。

目を閉じて息を整えると、俺と美雪が笑い合う姿が瞼の裏に浮かんだ。

「ねえ、見てみて俊次！ほんとにきれいでしょ！」

遠く後ろのほうで、無邪気にはしゃぐ美雪の声が聞こえた気がした。

ちょうどそのあたりには、雪の結晶の形をした白い花が、美しく、そして、寂しそくに咲いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2927/>

---

BLACK OUT

2010年10月14日20時49分発行